

詩篇66篇18-20節 「聞かれぬ祈り」

1A 生まれつきの盲人の言葉

2A 心に留めさせる罪

1B 心の調べの後の祈り

2B 仕切りとなっている罪

3B 偽善

4B 悪い動機

3A 恵みによる祈りの答え

1B へりくだり

2B 信仰

本文

詩篇 66 篇を開いてください、今朝は 66 篇 18-20 節に注目したいと思います。午後礼拝では、66-70 篇までを読みます。

18 もしも私の心にいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。19 しかし、確かに、神は聞き入れ、私の祈りの声を心に留められた。20 ほむべきかな。神。神は、私の祈りを退けず、御恵みを私から取り去られなかった。

今、この詩篇の著者は、とても大きな苦しみの中から救い出されて、それで神に大声で賛美をしているところです。その苦しみの時に神の名前を呼び求めたら、神が答えてくださいました。そしてこの言葉を発しています。心の中に不義があると、主は聞き入れてくださらない。けれども、確かに今、聞き入れてくださった。神の恵みがあって、神はその祈りを退けなかった、ということです。

1A 生まれつきの盲人の言葉

神は祈りを聞かれぬことがある、という言葉聞いて、皆さんはどう感じられたでしょうか？ある人は、「こういう祈りをしたのに、祈りは聞いてもらえなかった。」という失望感から、同意した人もいます。あるいは、「ええ？神は祈りを聞いてくださらないことがあるのですか？」とちょっと驚いた人もおられたかと思います。けれども、あることがあると神は聞いてくださいません。心に不義を抱えているなら、神は祈りを聞いてくださらないのです。

ここの詩篇の言葉を取り上げて、新約聖書には生まれつきの盲人がユダヤ人の宗教指導者にはっきりと言った言葉があります。「ヨハネ 9:31 神は、罪人の言うことはお聞きになりません。しかし、だれでも神を敬い、そのみこころを行なうなら、神はその人の言うことを聞いてくださると、私たちは知っています。」罪人の言うことはお聞きにならない、とはっきり言っています。この話は、イエ

ス様が生まれつきの盲人の目を開いた奇蹟から始まります。けれども、その日が安息日でした。それでユダヤ人たちは、安息日を破る者など罪を犯しているものに違いないと裁きました。けれども、生まれつきの盲目を直すよう祈りを聞くのであれば、その人が罪を犯しているはずがない。神は罪人の祈りを聞かれないからだ、ということです。

彼の言ったことは、本当でしょうか。これは、「その通りである」と言えるし、また、「その通りでない」とも言えます。

2A 心に留まらせる罪

1B 心の調べの後の祈り

「その通りである」というのは、詩篇 66 篇の言葉にあるように、心に不義を宿したままでは神に祈りは聞かれない、ということです。祈りというのは、関係に基づいています。人に話を聞いてもらう時に、その人と信頼関係がなければ聞いてもらえません。聖書では、天と地を造られた神は「父」と呼ばれています。「天にいます私たちの父よ。(マタイ 6:9)」と祈り始めることを、イエス様は教えられ増した。私たちは、子としてくださる霊を受けて、「私たちは御霊によって、『アバ、父』と呼びます。(ローマ 8:15)」とパウロは言いました。

例えば、大会社の社長に話すためには、その会社の本社に行き、そのまま会えるわけではありません。予約を取り、許可が与えられ、それで入る時も警備員から許可証を受け取り、受付を通り、社長室の前には受付をする職員がいて、それでようやく入れます。けれども、その社長の孫が遊びに来たらどうしますか？そのまま入れます！ですから、関係のあるなしによって、神に対しても祈りが聞かれるのです。

2B 仕切りとなっている罪

けれども、もし罪の中に自分が歩んでいたらどうなるのでしょうか？「もし私たちが、神と交わりがあると断言しながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのだから、真理を行なってはいけません。(1ヨハネ 1:6)」罪によって、神との交わりが断たれているので、祈りは聞かれないのです。

私たちはいろいろな祈りをしますが、昔は私が大学生の時は、キセルが当たり前でした。自動改札が導入される前のことですから、定期券を駆使して途中区間の電車代を浮かそうとするのです。まだ信仰を持つ前だったと思いますが、それでももちろん、やってはいけないことだと分かっていたのですが、一度だけやったことがあります。そして見事に、ばれてしまいました！今思うと、ばれて良かったと思います。けれども仮に私がこう祈ったらどうでしょうか？「主よ、どうかばれませんように！」この祈りは聞かれません。ちょっとこれは昔の話なので、今でも起こり得ることをお話ししましょう。「多すぎるお釣りが」ありますね。家に帰る途中で、それに気づきました。「どうか、レジの人が気づきませんように！」と祈りますか？その祈りは聞かれません。ちなみに、知っているのに

黙っていたら詐欺罪に問われるそうです。

自分が、明らかに罪の生活をしているとします。けれども、一日に少しだけ、「主をどうか私に安らぎを与えてください。」と祈ります。その祈りで、すべての罪は見逃してくれるとも思っています。ちょっとした祈りをしていれば、自分のあらゆる罪は大目に見てもらえると思います。いいえ、不義を心に留めていたら神は聞かれないのです。

イスラエルの民が一生懸命に断食をして、神に祈っていました。けれども、主が預言者イザヤを通してこう言われました。「59:1-2 見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」神との間に罪が仕切りとなって、聞いていないのです。神は祈りを聞くことができないのではなく、罪のゆえに祈りを聞かないのです。「箴言 28:9 耳をそむけて教えを聞かない者は、その者の祈りさえ忌みきらわれる。」神さまの感情が書いてありますね、忌み嫌われるのです。罪を留めたままで祈ると、ちょうど悪臭のように神には伝わるのでしょう。

3B 偽善

こうした偽善の祈りは聞かれません。偽善の元々の意味は「仮面」で、本当は、心は神と一つになっていないのに、表向き一つになっているように見せることです。イエス様が、二人のユダヤ人の祈りを紹介しました。パリサイ人と取税人です。「ルカ 18:9-12 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』」けれども、その後で彼の見下している取税人が来て、神殿の中にも入らず、天に顔を向けることをせず、胸を叩いて、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」と祈りました。どちらの祈りを聞かれたかという、イエス様は取税人の祈りを受け入れられています。心が伴っていないのに、本当の自分を神に持って行っていないのに、何とか祈りで取り繕うとする態度、これは偽善の祈りであり、神に聞き入れられません。

4B 悪い動機

ヤコブは手紙の中ではっきりと、「祈りが聞かれないのは、悪い動機で願うからだ」と言いました。「ヤコブ 4:3 願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。」自分のしたいことがあります。「これをしたい、あれをほしい。」このように、何かをしたいと思ってそればかりしています。それで、多くの問題を引き起こすのですが、「祈らなければいけないでしょう。」と他のクリスチャンから言われます。けれども、そのまま「神さまは、こうしてくださいますように。」と、その自分の強い意志を神の前に持っていきます。それでも聞かれませんでした。それ

で神に怒り出す、なんてことがありますね。

自分のやりたいことのために願っても、それは聞き入れられないのです。ヤコブは続けて、「世を愛することは神に敵対することだ。」と言っています。そして、「二心を清くしなさい。」と戒めています。「神に従いなさい。」と命令しています。そして、「主の前でへりくだりなさい。」と勧めています。自分のしたいことではなく、神のしたいことを求めるのです。自分の願いでなく、神の御心を求めるからこそ神はその祈りを聞いてくださるのです。

3A 恵みによる祈りの答え

ですから、神はたしかに罪人の祈りは聞かれない、ということが出来ます。けれども、もし生まれつき盲人だった男の言うことが正しかったら、誰一人、祈りを神は聞くことができないでしょう。なぜなら、だれも正しい人はいないからです。「ローマ 3:23 すべての人は、罪を犯したので」と使徒パウロは言いました。そして、ソロモンは、「罪を犯さない人間はひとりもいないのですから。(1列王 8:46)」と言いました。51 篇には、ダビデがバテシエバと犯した罪について、悔恨の祈りをしています。その祈りも確かに聞き届けられました。神は確かに、「あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(2ペテロ 3:9)」と言われました。

1B へりくだり

先ほどの取税人の祈りのように、罪人がへりくだる祈りは、神は喜んで聞いてくださいます。聖書の中に、「こんなのありか？」と思ってしまう、極悪人の祈りがあります。ユダの国の王マナセの祈りです。マナセはヒゼキヤの息子でした。ヒゼキヤは、すばらしい、主を求める王でした。ところが、マナセはヒゼキヤが残した霊的遺産を徹底的にぶち壊す、「反・宗教改革」を行いました。ヒゼキヤが取り壊した、異教の神々にいけにえを捧げる高き所を再び築き直しました。数々の忌まわしい偶像を作り直しました。そして、エルサレムの神の宮の中に、これらの偶像を置き、祭壇も作ったのです。そして、そこで忌まわしい異教の儀式であり、幼子を火で燃やす幼児犠牲を行いました。周囲の異邦人たちでさえ、そこまではしないだろうという恐ろしく、忌まわしいことを行いました。

主はマナセに語りかけましたが、言うことを聞きませんでした。それで、アッシリヤの王が彼を捕え移すようにされました。青銅の足枷をつながれて、バビロンに連れて行かれました。そして、こう書いてあります。「2歴代 33:12-13 しかし、悩みを身に受けたとき、彼はその神、主に嘆願し、その父祖の神の前に大いにへりくだって、神に祈ったので、神は彼の願いを聞き入れ、その切なる求めを聞いて、彼をエルサレムの彼の王国に戻された。こうして、マナセは、主こそ神であることを知った。」マナセの祈りを神は聞かれたのです。彼を王国に戻されて、マナセや主こそ神であることを知りました。その後マナセは、自分の立てた偶像を取り壊し、祭壇も投げ捨てました。

いかがでしょうか、マナセのような者の祈りを神が聞かれるということは、「神が聞くことのできな

い罪人の祈りはない。」ということになります。ここまで墮落した、落ちることはないと思われるような状態であっても、神はその祈りを聞いてくださるのです。イザヤ書1章には、罪を宿したままで行なう祈りやいけにえを、忌み嫌うという神の言葉を話しました。けれども、神の前でへりくだって、悔い改める者については、「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、羊の毛のようになる。たとい紅のように赤くても、羊の毛のようになる。(18節)」と神が約束してくださっています。

神はそして、父と子という関わりを回復してくださいます。放蕩息子の話が、それです。弟息子が父の財産の分け前を生前に受け取り、なんとそれを放蕩の限りを尽くして散財しました。その時に飢饉が来ました。彼は食べる物がなく、なんと豚のたべる餌を食べたいと思うほど空腹になりました。その時に我に帰りました。「私は天にも、父にも罪を犯した。戻っていき、家の僕にしてもらおう。」彼は戻りましたが、父はずっと彼の帰宅を待っていました。彼であると分かると父は走って行って彼に抱き付き、接吻をし、そして彼が見つかったことを喜んで、なんと祝宴をしました。息子は、「私は罪を犯しました。もう私はあなたの子と呼ばれる資格はありません。」と言いましたが、父は、彼に良い着物をきせ、靴を履かせ、指輪も付けさせました。息子の資格であることの証拠です。

ですから神は、私たちがへりくだって祈りその祈りは、自分がどんな状態であろうとも聞いてくださるのです。66 篇の最後を見てください、「神は、私の祈りを退けず、御恵みを私から取り去られなかった。」と言っています。祈りを聞かれたのは、神の恵みによるものです。

2B 信仰

ですから、そのままの姿で、自分の心を隠したりせず、ありのままの姿で行ってください。罪を認めて、罪を言い表し、神に近づいてください。神は受け入れてくださいます。そこには、信仰が必要です。私はイエスのところに行くのだ、という信仰が必要です。イエス様は何度となく、「あなたの信仰があなたを救ったのです。」と言われました。自分の心を広げるといことは、勇気が要ります。これまでの自分のしがらみ、自分が生きてきたのだという自負を捨てなければならないことです。しかし、神は裸で私たちに生を与え、裸でこの土地に帰させます。母の胎内から既に作ってくださった神は、私たちが幼子のようになって神の前に素直に出ていくことを願っておられます。

罪深い、不道德な女がいました。イエス様が、パリサイ人の家で食事をされているのを知りました。パリサイ人とは、最も律法に厳格な人たちです。その中に入るということは、彼女が罪人と判断されるのは間違いなしです。けれども、彼女はイエス様のところに言ったのです。この方は、私を受け入れてくださった。この罪深い私を、そのまま受け入れ愛してくださった。そこで、彼女はパリサイ人の家に入って、イエス様の足を自分の涙で濡らし、口づけし、香油を塗りました。そしてイエス様は、「あなたの罪は赦されました。」と言われ、そして「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。(ルカ 7:50)」と言われたのです。他にも、長血を患う女がいます。彼女はイエス様のところに押し寄せる群衆の中に入り、そしてイエス様の着物の裾にさわったのです。すると癒されました。そしてこの女にも、「あなたの信仰があなたを救ったのです」と言われたのです。

神は確かに、罪人の祈りを聞かれます。そのままの姿で、身を任せるようにして、自分を明け渡すようにイエス様に近づけば、イエス様はそのまま受け入れてくださいます。何も繕う必要はありません。マナセを神は受け入れられました。不道德な女を受け入れられました。長血のような病のある者をそのまま受け入れられました。このようにして神に近づけば、罪が赦され、救われたという喜びで満たされるでしょう。そして、この詩篇の著者と同じように、神に対して喜び叫び、賛美にみたされることでしょう。